

研究ノート

## 日本地蔵信仰史研究概観

清水 邦彦<sup>※</sup>

### はじめに

地蔵はもともと仏教の菩薩であり、日本人にとって外来の「カミ」であるが、それと気付かないほど現代の日本人にとって身近な存在となっている。

しかしながら、日本に於いて地蔵信仰がどのように受容され、展開するようになったか、先行研究では明確ではない。本稿は、戦後の地蔵信仰史研究の流れを略述することによって、地蔵信仰史研究の問題点を整理することを主眼とする。

なお、私の能力と紙幅の関係上、本稿で取り上げるのは、地蔵信仰史研究に影響を与えた著書・論文を中心とした。関心のある方は本稿末に付した地蔵信仰研究文献目録を参照の上、本稿で取り上げられなかった諸研究に当たっていただければ幸いである。また本稿では敬称を省略した。

### 1 真鍋広済による研究

日本地蔵信仰史についての先行研究を略述するにあたって、まず第一に、戦前から戦後の地蔵信仰史研究の第一人者、真鍋広済について述べなければならない。

真鍋の功績は、それ以前の通説を史料に即して改めたことにある。例えば真鍋以前に於いては群書類従に収められた『地蔵菩薩靈驗記』は『今昔』の地蔵説話の出典である、とされていたが、真鍋は曾我兄弟の記述（巻中第14話）があることから、群書類従本は後世の改編・増補を受けたものであり、『今昔』の出典となった原典ではない、と通説を改めた

※日本学術振興会特別研究員

ことが挙げられる。（真鍋 1928）

但し、真鍋の研究は、『今昔』・『沙石集』・『地蔵和讃』といった文芸の分析が中心である。例えば真鍋1959には「日本文学と地蔵尊」という章があり、真鍋本人も自分の立場を「地蔵文学研究」としている。（1959：p3）宗門の家に生まれ、竜谷大学で学び、教えた真鍋である故、文学以外の經典の分析は詳細に渡るが、歴史的側面の分析は今一步の感がある。

また、真鍋の著書には、啓蒙の側面が多分にあり、現在の研究のレベルからは物足りない箇所もある。これはある意味では当然のことである。真鍋本人が著書を研究書としていないからである。例えば真鍋1960aに於いては、本書の著作意図を「永い歳月に亘って集めた地蔵写真をアルバムのようにして、それに平易な入門的な地蔵概説を組み合わせ一冊にしよう。こんどは気楽に見たり読んだりして楽しめるものを作ろう」（p1）と述べている。その結果からか、真鍋の著書には註が一切ついていない。また引用史料については出典の頁が記されていない。従って、真鍋の著書は研究書ではない。（但し、論文には註・出典の頁の記載がある。）

具体的問題について一つ論じたい。真鍋1960aには種々の「地蔵和讃」が収められている（p171～250）。その中には真鍋1960aにしか収められていないものもあり、大変貴重なものであるが、残念ながら出典が記されていない。真鍋に限って架空の地蔵和讃を作り出したとは考えられない。しかし、これらの地蔵和讃が文献から引用されたのか、真鍋が直接採録したのか、当時、唱えられていたも

のか否か、どの地域で唱えられていたものなのか、といった諸点に真鍋が言及していない以上、研究史料として活用しがたいのが現状である。

以上の問題はあるが、真鍋の研究は戦後の地藏信仰史研究の進展に大きく寄与しており、現在でも地藏信仰史研究には欠かせないものである。

## 2 歴史民俗学者による研究(和歌森太郎・桜井徳太郎)

戦後の地藏信仰史研究には四つの流れが想定される。まず第一に、和歌森太郎・桜井徳太郎という二人の民俗学者による研究が挙げられる。(和歌森1951・桜井1970a・b)

両氏の研究は、文献史料と民俗調査とを勘案した優れた研究である。特に以下に引用する和歌森の仮説は、現在でもしばしば引用され通説化している。

(補—古代・中世に於いて、地藏が子供の姿を取って出現することについて)日本人の信仰観念の上に、地藏の信仰をうまく移植するに当たって、子供と化して語りかけ、行動する地藏を説話することが求められたのではなかろうか。とにかくこの関係を語ることによって地藏を一段と普及させようと、当時何らかの効果期待されたのではないかと、後の民俗的事実より逆推しても怪しまれるのである。それを選んだ理由は、時代の事情という点にあるのではなしに、日本人の伝統的心情に基づくのではなかったかと考えられる。

しかし、両氏の研究は、現在の民俗を分析するという民俗学の性格上、どうしても過去と現在とのつながりが中心とならざるをえない。

(前述の和歌森の仮説もそうである。)無論、両氏の著作は安易に古代の地藏信仰と現在の地藏信仰を結びつけるものではない(参考—和歌森1969:p43)。また、地藏信仰の歴史的

変遷についても言及している。が、両氏の研究は時代を追って地藏信仰史を著述するという形態をとってはいない。

## 3 古代史学者の研究(井上光貞・菅原征子・速水侑等)

第二に古代史の立場からの研究がある。その先駆として、井上光貞1975が挙げられる。井上は、歴史学の立場から種々の文献史料を駆使し、平安後期に於ける地藏信仰の受容・展開を末法思想及び平安浄土教の中に位置付けようとした。井上の文献史料に基づいた論述は、地藏信仰史研究のレベルを上げたと考えられる。が、井上の論述には種々の問題がある。まず、平安浄土教から法然浄土教という歴史の変遷を考察の結果、「阿弥陀仏が真実に救済者とし純化されていないためにこの空白を埋めるものとして」平安時代の地藏信仰は発達し、「もし親鸞のような人が悪人を対機とする念仏をひろめ、阿弥陀仏が真に悪人のための救済者として純化されれば、浄土教のなかに吸収されて(補—平安時代の地藏信仰は)その成立基盤を失なうであろう」(1975:p246)と述べている点が挙げられる。この記述について、井上は史料を一切挙げておらず、あくまで井上の「仮説」とすべきかもしれない。が、史料を挙げずに以上のような記述を行なうことは、他の箇所の詳細な史料分析との相違が大きすぎ、読み手に誤解を与えかねない。また、地藏信仰が親鸞によって直接的に影響を受け衰退・変化した形跡は確認されず、井上の「仮説」は史料の上からも否定される。(この点は後の研究者の論議の対象となる。)

次に井上の論述には種々の誤りが見られる点が挙げられる。例えば、1975:p256に於いて、「地藏が墮地獄の人に代わって苦しみを受ける話は(補—『今昔』巻17)22・31・37(補—話)」としているが、第22話は地藏が衆生に代わって苦を受けようと言ったのみであり、また37話は第27話の誤りである。(第22話「小

僧泣テ云ク、「此ノ男ノ法終ニ不可転ハ、我レ此ノ男ニ代ラム。設ヒ一劫ト云トモ、我レ其ノ苦ヲ受ケム」ト。冥官衆此ヲ聞テ、驚テ、即チ盛孝ヲ小僧ニ免シ奉リツ。」・第27話「地藏菩薩此ノ地獄ニ来リ給テ、日夜三時ニ我ガ苦ニ代リ給フ。」・第37話は行基を主題とし、地藏の出番はない。「行基菩薩教女人惡子給語第三十七」)

まとめると井上の功績は、種々の史料分析から、地藏信仰を平安浄土教の中に位置付けたことが挙げられる。しかし、以上述べた通り、その論述には史料に基づかない箇所もあり、問題が残ると言える。

井上の研究を受け継いだものとして、菅原征子1966・速水侑1969・1975が挙げられる。

まず菅原について論ずれば、經典の原典に逐一あたり(1966註16)、また往生伝を幅広く参照することによって和歌森・井上といった先学の検証を行なった点が評価される。特に井上の“親鸞以降<平安時代的>地藏信仰が衰退するはずだ”とする「仮説」を修正し、新たな見解を提出したことは卓見である。菅原独自の新たな見解とは、平安時代地藏信仰には二通りあり、一つは、井上の言う、貴族社会における阿弥陀仏が真実に救済者として純化されていないためにこの空白を埋めるものとしての地藏信仰であり、もう一つは庶民生活における現世利益を中心とした地藏信仰である。そして貴族社会の地藏信仰は井上の言う通り法然・親鸞の浄土教確立以後消滅し、庶民生活の地藏信仰は中世を通じて現世利益性・呪術性を増して発展していく、とするのである。(p48~49)

菅原の以上の修正は、鎌倉時代以降、地藏信仰がさらに発展していった史実を考えるに、妥当である。但し、地藏信仰の中身に関しては具体的史料を挙げずに論じており、実情にそぐわない。鎌倉時代以降、地藏信仰は現世利益性ととともに葬祭儀礼に活用されることによって広まっていくことが、種々の文献から

確認される以上、菅原説には不備がある。(この点は速水によって修正される。)

次に速水侑について論じたい。速水的地蔵信仰史研究についてまとめる前に、彼の立場を確認すると、速水の研究対象は地藏に止まるものではなく、仏菩薩信仰を中心とした奈良・平安仏教である。その幅広い研究は、地藏信仰史研究の成果にも現われている。

地藏信仰史研究に関する速水の功績は以下の三点である。まず第一に、奈良仏教に於いて、地藏が虚空蔵信仰の一部として信仰されるに過ぎなかったことを明らかにした点である。

(速水1969)

第二に、六地藏が六観音を踏まえて成立したものであることを明らかにした点である。そもそも六地藏は經典に根拠はない。(日本成立の偽經は除く。)速水はもともと『摩訶止観』を基にした六観音信仰が日本にあり(十世紀)、そこから六地藏が生まれた(十一世紀)のであり、六地藏は日本独特の信仰であることを史料より明らかにした。(1970:p116~220・1975:p63~71)

第三に、鎌倉時代以降、地藏信仰は現世利益中心となっていく、としながらも、来世的菩薩としての側面も失われたわけではなかった、と井上の仮説・菅原の見解を一部修正した点である。(1975:p145~156・この見解は圭室諦成に拠っている。後述)

しかしながら、速水の一連の研究には少なくとも三つの問題がある。

第一に中国宋代の地藏説話集、常謹『地藏菩薩応驗記』の解釈に誤りがある点である。

(但し、速水は異本『地藏菩薩像靈驗記』を使用。両書の関係については梅津次郎1966・牧野和夫1991・清水邦彦1992参照。)例えば1969に於いて「常謹『地藏菩薩像靈驗記』33説話について、地藏の功德により往生し得たところをみると、西方浄土と明記するものは1説話(第9話)にすぎず、(略)地藏・阿弥陀の併修は3説話(第24・26・30話)あるが、

これも、我が『今昔物語集』のそれに比し、まことに寥々たるものといわねばならぬ。」(p98~99)とした上で「中国の地藏説話について、地藏と浄土の関連をみると、『今昔物語集』のような、地藏と弥陀の併修、地藏による極楽往生のごとき傾向は、認めることができぬ。」(p98)と述べている。まず『地藏菩薩応驗記』(『地藏菩薩像靈驗記』)は全33説話ではなく、全32説話である。但し、これは1969に限られ、1975:p88では「32」となっていることから誤植であろう。(しかし、桜井徳太郎編1983に速水1969が所収される際にも誤植はそのままであり(p112)、桜井編1983が多くの人々に読まれていることを鑑みるに一応指摘した。)

次に速水は『応驗記』には西方浄土と明記するものは1説話(第9話)に過ぎない、としているが、第11話には「昨日より西方仏を専念し、ただ今浄土に往生す。言いおはりて合掌して西方卒に向ふ」とあり、速水の1説話とする記述は誤りである。

また第11話は地藏を供養している人が阿弥陀仏を念ずることによって、西方浄土に往生した話でもある。従って、第11話は地藏・阿弥陀の併修の話とすべきである。従って、地藏と阿弥陀の併修を3説話(第24・26・30話)とした速水の記述は修正すべきであろう。

さらに、『応驗記』の説話の数によって、「地藏と弥陀の併修、地藏による極楽往生のごとき傾向は、認めることができぬ」としたことも問題である。前述の如く、『応驗記』には地藏と弥陀の併修の話及び地藏の引導による極楽往生の話が合わせて4話存在する。全32話から見れば少ない数かもしれないが、果たしてそのような統計処理が地藏説話分析に有効であろうか。

第二に速水の詳細な論述は、鎌倉時代までで、室町時代以降は簡略なものである点である。この点は速水自身も認めている。(1977年9/18仏教民俗研究会シンポジウム「地藏信

仰」に於ける速水の発言。同シンポジウムの議事録の一部が『仏教民俗研究』5号1980に収められている。)

第三に速水の鎌倉時代に関する論述は、専修念仏(速水の用語では阿弥陀専修)を軸にしながらも、法然(或は親鸞)が地藏をどう位置付けていたのか、若干の記述はあるものの、意を尽くしていない点である。また、法然門弟がどう地藏を位置付けていたかについては、『沙石集』巻1第10話を引用するのみである。つまり、法然の専修念仏を軸にしながら、法然浄土教についての分析が足りないのである。

まとめると速水の研究は井上を踏まえつつ、地藏信仰を奈良・平安仏教史の中に位置付けた点は評価されるが、それ以外の時代(中国宋代・鎌倉時代・室町時代)については、問題が残るのである。特に、法然の意義を高く認めながら、その影響を論じきれていない点は問題である。

以上、井上・菅原・速水の研究は主として平安時代を中心とするものであった。その延長として田中久夫・渡浩一の研究が挙げられる。田中に関しては民俗学、渡に関しては日本文学の研究者とすべきであるが、地藏に関する以下の論考は、平安・鎌倉時代の文献史料を中心に論じたものであり、井上・菅原・速水の研究を踏まえたものと解釈できる。

まず田中久夫の研究をまとめたい。(1972・1989)田中の研究は、題目からも分かる通り、平安時代から鎌倉時代の地藏信仰の伝播者の解明を主眼とする。通説では、平安時代の地藏信仰の担い手は、天台の仏教徒とされていた。(和歌森1951・速水1969)田中の功績は、第一に平安時代の地藏信仰の伝播者として天台の仏教徒とは別に真言系の修験者も存在していたことを明らかにしたことにある。そして第二に、鎌倉時代に於いて積極的に地藏信仰を伝播していたのは、平安時代を引き継ぐ形で、真言密教の聖であることを明らかにし

たことが挙げられる。

しかし、田中の論考の問題点は功績と表裏に存在する。というのも、田中は鎌倉時代、真言密教の聖が地藏信仰を伝播していたとしている。これは史料から導きだされた結論であり、異論をはさむ余地はない。が、鎌倉時代の地藏信仰の伝播者は、真言密教の聖に限られる訳ではない。(少なくとも田中は他宗派についての言及をしていない。)つまり平安時代の地藏信仰の伝播者について、田中が通説を補足したように、鎌倉時代の地藏信仰の伝播者についての田中の説は、不十分であり、他宗派の分析も必要とされるのである。その他、田中の地藏に関する諸論考としては、1986があり、地藏信仰と民俗事象の諸問題を論じている。

最後に渡浩一1977・1980について論じたい。渡は『今昔』の各説話に於いて阿弥陀・観音の救済と対比するに地藏は、悪人救済を主とすることを明らかにした。これまでの研究に於いて他の仏菩薩との対比がさほど行なわれなかったことを考慮するに、渡の功績は大きい。

但し、「『今昔物語集』巻17第2話・第10話・第17話・第22話・第23話・第29話には(補一地藏信仰と)弥陀信仰や念仏信仰との併修が語られている。また、これは日本のみにみられる特徴で既に平安末期地藏信仰の特徴として諸家により指摘されている。」(1977:p22)と述べているが、地藏信仰と弥陀信仰・念仏信仰との併修は前述の如く中国宋代『地藏菩薩応驗記』にもみられる。

なお、渡の研究はこの後、中世地藏説話に移る。(1983・1984) 渡の功績は、井上以後、平安時代の地藏信仰と鎌倉時代の地藏信仰との相違点が強調される風潮に対し、中世の地藏説話に往生譚が少なくないことから「古代と中世の地藏信仰の間にそれ程大きな断絶はないと断言してよかろう」(1984:p90)と述べたことである。但し、この結論は、平安時

代と鎌倉・室町時代の地藏説話をそれぞれ集計し、分類し、説話比(例えば現世利益譚の数/全説話数)を比較したところ、ほぼ同様の比率になったことから導かれたものにすぎない。渡自身も「説話の詳細な検討、教義との関連、民俗信仰との関係など多くの問題が残されているが、それらについては今後の課題としたい」(1984:p91)と述べている。が、この後、この課題に深入りすることなく、1985年以降、渡の研究は江戸時代の地藏信仰へと移ってゆく。

#### 4 地藏信仰の民衆的展開

以上の如く、平安時代を中心とした地藏信仰史研究は優れた研究成果がある。これに対し、鎌倉時代以降の地藏信仰史研究は、①地藏信仰の民衆的展開、②宗派研究、の二つの視点からの研究がある。

①地藏信仰の民衆的展開、に関しては、圭室諦成1963a・bに端を発している。圭室の研究主旨は、室町時代以降、地藏信仰は現世安穩・後生善処という二世に渡る利益を担うことによって民衆に普及していった、とするものである。圭室のこの見解は、現在に至るまで地藏信仰史研究の定説となっている。

しかし、民間の地藏信仰が時代変遷と共にどう変わっていったか、という視点に立った研究はほとんどない。例えば、江戸幕府の檀家政策によって地藏信仰がどう変わっていったか、明治政府の神仏分離政策によって地藏信仰がどう変わっていったのか、といった問題を正面から取り上げた研究は管見の及ぶ限りない。無論、時代毎に変化するはずだ、という前提を持つ必要はないが、時代毎の変化が全くないとも考えにくい。従って、現在、圭室の提言を時代を追って吟味する必要があると考えられる。

なぜ室町時代以降の地藏信仰史研究は手薄なのか。この問題に対して桜井徳太郎が手短かに解答を示している。「地藏信仰の歴史的研究

は、中・近世に手薄である。この期の史料が少なくとか信仰が不活発であったというのではなく、むしろ資料が多く、地域的にも広く深く機能したが故に、かえって全体をつかまえるに通り一遍の力のいれようでは成功しないからであろう。」(桜井編1983:p299)では室町時代以降の地藏信仰史を構築するためにはどうすれば良いか。桜井はまず特定地域の特異な形態の地藏信仰解明を行い、それらの積み重ねによって、民間の地藏信仰を総観し、中・近世・現代へと推移する状況を体系的に整理すべきである、としている。(前同)当然、桜井のこの見解は、是認されるべきものである。以下、室町時代以降の地藏信仰史を構築するために不可欠な地藏信仰研究について略述する。

江戸時代の地藏信仰について、有益な研究を行なっているのは、渡浩一である。1985年以降の渡の研究は、主として江戸時代の地藏関係の史料を翻刻し、解説を加えるというものである。渡の研究成果は、今後の江戸時代以降の地藏信仰史研究の大きな手助けとなる。

民俗学者の諸研究も一特定の地域・形態に限定されるが一地藏信仰史を構築するに不可欠なものである。例えば藤田稔1969は鎌倉時代から昭和年間の地藏信仰の展開を略述したもののだが、論述の対象は鎌倉・茨城に限定されている。民俗学の地藏信仰研究の代表的成果は大島建彦編1992に収められている。また、地方史文献や民俗誌・伝説集に現れた地藏信仰を民俗調査を踏まえて論じたものとして、石川純一郎1995が刊行された。その研究の地域範囲は全国に及んでいる。(北海道・沖縄を除く。)

石仏研究の立場からも地藏信仰史研究に役立つ研究成果が出されている。代表的なものとして、『日本の石仏』1984 No.32・1994 No.71に所収された諸論文が挙げられる。

1970年以降、盛んになり、社会問題ともなった水子供養(水子地藏信仰)については、神

原和子・岩本一夫・大西昇1985・1987・1988・現代社会学研究会1992等の調査報告を経て、近年まとまった研究成果が出されるようになってきている。(La Fleur, R. William 1992(1)・R. Jツヴィ・ヴェルブロウスキー1993・森栗茂一1995・清水邦彦1996)しかし、水子供養が盛んになった時代背景や以前からの地藏信仰との類似点・相違点等、論議の足りない点も残されている。

以上、地藏信仰の民衆の展開について言及した諸論考を紹介したが、室町時代以降の地藏信仰史の全体像を構築するには至っていない。

## 5 鎌倉仏教諸宗派の宗派研究

②宗派研究、については鎌倉仏教諸宗派のうち、<道元を祖とする>曹洞宗(2)の地藏信仰についての論考が一番盛んである。(松山善昭1967・広瀬良弘1981・1988:p376・408~410・山本世紀1981・石川力山1985・中野豈任1988:p206)曹洞宗の地藏信仰諸研究の主旨は、瑩山以降、曹洞宗は葬祭儀礼・民間信仰を取り入れる過程の中で地藏信仰を取り入れられていった、とするものである。この論旨については地域性等未だ不明な点もあるが、大枠認められるものである。これらの諸研究の問題点としては、曹洞宗の地藏信仰が古代の地藏信仰とどう関連し、また変化しているのか、同時代の他宗派の地藏信仰との共通点・相違点は何かといった論述がないことが挙げられる。(臨済宗との関連については後述)また、曹洞宗が根付いた江戸時代以降の研究について比較的手薄であることも問題としている。現代日本の地藏信仰を代表する寺院の中には東京都豊島区高岩寺<巢鴨とげぬき地藏>・東京都文京区林泉寺<縛られ地藏>など曹洞宗に属するものも多い故、この問題も今後解明すべきものであろう。

同様のことは、所謂鎌倉旧仏教諸宗派の地藏信仰研究にも言える。旧仏教の地藏信仰は

圭室諦成1974：p117～120・黒田俊雄1988：p97が早くから着眼していたが、各宗派に関する研究に於いて地蔵信仰についての論及はほとんどなかった。貞慶の地蔵信仰が東大寺知足院との関連で論ぜられるに過ぎなかった。（上田さち子1977・竹居明男1980）

貞慶が著した『地蔵講式』が平雅行1992によって活字化され、ようやく貞慶を中心とした法相宗の地蔵信仰が研究対象とされるようになってきた。貞慶の『地蔵講式』については、①貞慶の民衆的動向への関心の深さを現わしている（平1992：p275）、と見るか、②単に依頼されて著されたものにすぎないか、（西山厚1988：p256）と見るか、意見の分かれるところである。しかし、旧仏教諸宗派が地蔵信仰を取り入れていったことを考えると、貞慶の『地蔵講式』を多面的な角度から分析することが必要であろう。

貞慶の地蔵信仰を引き継ぐ弟子として良遍が挙げられる。良遍は法相教学を集大成した学僧であるが、彼の地蔵信仰はこれまで先行研究では着眼されてこなかった。（成田貞寛1960を除く。）①良遍が信仰した東大寺知足院の地蔵像が現在でも信仰の対象となっていること、②良遍の影響を受けた僧として忍性が挙げられること（追塩千尋1995・清水邦彦1995c）、③良遍の法相教学は現在に至るまで影響を及ぼしていること、の3点を考えると、良遍の地蔵信仰とその影響を分析することは、旧仏教の地蔵信仰を考える重要な手がかりとなろう。

旧仏教の地蔵信仰を考察する上で、最も重要と考えられるのが、忍性を中心とする真言律宗である。というのも、忍性教団は、民衆教化に精力的だったが、その際、地蔵画を配ることを一機縁としていたからである。（『画シテ地蔵與フ男女ニ一千三百五十五』『性公大徳譜』・『自画文殊地蔵。分與男女』『本朝高僧伝・相州極楽寺沙門忍性伝』）

忍性の地蔵信仰については、早くは中村元

1946が若干言及している。その趣旨は、悪人救済を主とする地蔵菩薩は、非人救済を主とする文殊菩薩を信仰する忍性にとって、受容し易い存在であった、というものである。

忍性（及び忍性教団）の地蔵信仰に関しては、堤禎子1992・松尾剛次1995・追塩千尋1995の諸研究がある。（その他忍性と関わりのある地蔵像＜極楽寺・三村寺・箱根等＞については、多数の論文がある。）堤1992は現茨城県域に忍性（教団）が地蔵信仰を広めていった過程を現地調査を踏まえて明らかにしたものである。松尾1995・追塩1995は戒律研究の角度から忍性を分析する中で、彼の地蔵信仰に言及したものである。従って、忍性の地蔵信仰の源は何か、同時代の地蔵信仰と比較してどういった特徴があるのか、忍性の地蔵信仰は後にどのような影響を及ぼしたのか、といった諸問題にはいずれの論文も手薄である。後への影響については、忍性が律院化した常陸国三村寺が廃寺になったにも関わらず、寺跡入り口にある湯地蔵が現在でも信仰を集めている以上、今後の分析が必要である。

また、古典文庫に所収された『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』の増補者「良観」が良観坊忍性であるかどうか、という問題も未だ結論が出ていない重要案件である。堤1992・松尾1995では増補者「良観」を忍性とする説を有力視している。が、『岩船山地蔵菩薩縁起』仮名本（成立1744年）に「右の御縁起は往古より当山に伝有て天和年中（補＝1681～84年）江州三井寺沙門良観僧都の続篇せる地蔵菩薩靈驗記第九巻にもあらまし是を記せり」とある。『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』第9巻第12話と『岩船山地蔵菩薩縁起』第2巻とは非常に類似しており、『岩船山地蔵菩薩縁起』の記述は、増補者良観に関する史料として認められるべきであろう。（渡浩一1986）従って増補者「良観」を忍性とする説を肯定するのは無理がある。しかし、増補者良観を忍性とする説にもそれなりの論拠があり（渡辺綱也1966：

p519～520), また『岩船山地蔵菩薩縁起』の記述の信憑性も問題が残る。従って、今後もこの問題に対して今後も様々な角度からの論究が必要であろう。

＜平安時代の地蔵信仰の担い手であった＞天台宗・真言宗の鎌倉時代に於ける地蔵信仰がどうであったか、という研究はほとんどなく、田中1972・1989が真言宗について言及するのみである。天台宗・真言宗は鎌倉時代以降も変遷はあったものの、勢力を保ち、現在も日本の仏教に於いて重要な位置を占める。従って、両宗の地蔵信仰が鎌倉時代以降どうなっていたのか、という研究は今後必要とされる。特に真言宗については、新義真言宗の開祖とされる覚鑑が『地蔵講式』（『興教大師撰述集・下』p31～33）を著していること、地蔵和讃に覚鑑作のものが伝わる（真鍋1960a：p171～175）こと等の問題と実際の信仰との関係が未だ不明であり、今後の研究の進展が期待される。

以上の如く、鎌倉旧仏教諸宗派の地蔵信仰に関する研究は始まったばかりであり、未解決の問題が累積している。

話を新仏教諸派に戻す。同じ禅宗でも曹洞宗と比べて、研究が希薄なのは臨済宗の地蔵信仰である。これは曹洞宗は宗祖道元の教義が地蔵信仰と相容れにくいに対し、臨済宗は当初より地蔵信仰と併存していたので、臨済宗の地蔵信仰受容が問題とならなかったことを一因としよう。例えば宗祖栄西の著した『菩提心別記』では「余、少年より顕密の教法を学び菩提心を求む。（略）ただ地蔵を以て心源となす」（日本大蔵経43巻p645）と地蔵を菩提心の源としている。また、別の箇所では「一日（補一 地蔵を）称念すれば餘の菩薩に勝れたり」（前同）と地蔵の功德は他の菩薩より優れている、としている。従って、初期臨済宗の寺院で地蔵像を祀っているものは多い。（建長寺・円覚寺等）

臨済宗の地蔵信仰を明らかにするに際し、

問題点としては、以下の4点が挙げられる。まず、無住が編集した『沙石集』・『雑談集』には『地不の決』の地蔵に関する記述が引用されているが、この『地不の決』は無住によれば栄西が記したものとされている。しかし、『地不の決』は栄西の著作目録にはない。多賀宗準1958は『地不の決』を『菩提心別記』とを異名同書としている。しかし、以下の記述を見て分かる通り、両書の相違は激しく、同書と見做すには困難である。

『沙石集』巻2第5話

建仁寺ノ本願僧正ノ口伝ニ、「地不ノ決」トテ、一卷ノ秘書アリ。其中ノ肝心ニ、地蔵ハ大日ノ柔軟ノ至極、不動ハ強剛ノ方便ノ至極トイヘリ。

『雑談集』巻6

故建仁寺ノ本願ノ口決ニ、地不ノ決ト云書有之。地蔵ト不動トノ方便ハナレテ、不可出離。地蔵ハ大日ノ柔軟ノ慈悲如母。不動ハ大日ノ智恵降伏ノ至極如父。サレバ不動ハ如斧。地蔵ハ如釜。互ニ一徳ヲ主ドテ、衆徳ヲ隠スナルベシ。

『菩提心別記』（前掲p647）

総じて之をいはば地蔵は風輪の柔軟の体、不動は風輪忿怒の体なり。

従って、両書の関係は不明である。つまり栄西の地蔵信仰には未だ不明な点も残されている。

次に、臨済宗で地蔵像を祀る寺院の多くは、それ以前から地蔵像を祀っていた寺院を改宗したものである（鎌倉建長寺等）が、以前からの地蔵信仰と臨済宗改宗以後の地蔵信仰との共通点・相違点が明らかにされていない問題が挙げられる。（建長寺については藤田稔1969が若干言及している。）

第三に、臨済宗は他宗派同様葬祭儀礼の導入とともに地蔵信仰を受容していったとされているが、具体的過程は明らかではない問題が挙げられる。例えば、臨済宗の葬祭儀礼を集大成した『諸回向清規』（1565年成立）には



地藏を伴う諸儀礼（六道地藏・亡者受戒）を記しているが、これらの儀礼がどの時代まで遡れるか、不明である。これらの儀礼は現行の臨済宗儀礼にまで受け継がれている（松浦秀光1969：p59等）ことを考えると、重要な問題である。

第四に『諸回向清規』『亡者受戒』（大正蔵81巻659中）の記述とほぼ同文が曹洞宗の切り紙にも見られる点である。（石川力山1986：p187～188）とすれば、臨済宗の地藏信仰と曹洞宗の地藏信仰とは同一の基盤に立っていたのだろうか。或いは一方が他方に影響を与えたのだろうか。

以上の如く、臨済宗の地藏信仰史には不明な点が多い。

一遍時衆の地藏信仰は、時宗史料が現存しないことから、分析は困難である。その中で群書類従所収『地藏菩薩靈驗記』の曾我兄弟の記述と時宗との関連が先行研究に於いて論ぜられてきた。（角川源義1969・真野俊和1980・清水邦彦1995b）ただし、大橋俊雄1973：p211～213は、多くの時宗寺院では地藏像が安置されており、その中には地藏像を祀り始めた年代がかなり遡れるものもあることを明らかにしている。さらに今井正晴1975は現存史料から一遍・真教と地藏信仰の接点を明らかにした上で、13世紀末以降、時宗と地藏との結びつきが各地でみられるようになったのではないかと述べている。従って、今井の説がどこまで妥当か、また、時宗と地藏とを結びつけたものは何であったか等の問題について今後の研究の進展が待たれる。

鎌倉新仏教の先駆的存在とされる浄土宗の地藏信仰については管見の及ぶ限り、まとまった論考はない。これは専ら阿弥陀仏の名号を唱えればよい、という法然の教えと地藏信仰とは会通しにくい故、浄土宗研究では地藏信仰を取り上げにくいことをが一因と考えられる。（但し、法然は地藏菩薩を全面的に否定していた訳ではない。清水邦彦1993）しかし、

法然の登場によって、地藏信仰が衰退（或いは著しく変化）した形跡はみられない。（渡浩一1984・清水邦彦1995a・局地的・短期的には『沙石集』巻1第10話の如く、法然門弟によって地藏像が破壊されることもあっただろうが。）また現在、京都市中京区矢田寺＜矢田地蔵＞・京都市伏見区大善寺＜伏見六地藏＞等、浄土宗寺院で地藏像を祀ることは珍しいことではない。宗派として地藏像を祀るようになったとは考えにくいだが、個別の寺院に即して研究すれば良い、というものでもなかろう。浄土宗に於いて、いつ頃から地藏信仰を受容していったのか、それは何派に顕著だったのか、といった視点の研究も今後必要と考えられる。

最も地藏信仰と縁遠いと考えられる浄土真宗・日蓮宗寺院でも、地藏像を祀ることはないわけではない。（日蓮宗—京都市北区常徳寺＜常盤地藏＞・東京都練馬区妙徳寺＜六地藏＞等。浄土真宗—東京都新宿区専徳寺＜名和地藏＞・東京都中野区神足寺＜軍人子育地藏＞等。但し多くは明治時代以降に祀り始めたもの。）しかし、浄土真宗史研究に於いても、日蓮宗史研究に於いても地藏信仰との関わりについては管見の及ぶ限りほとんど言及されることはない。（日蓮宗と十王信仰との関連については、松村寿巖1971参照。）

以上、鎌倉仏教諸宗派の地藏信仰史研究について現況をまとめてきた。まとめれば、曹洞宗・法相宗・真言律宗についてはまとまった論考があるが、それ以外の宗派についてはないこと、曹洞宗・法相宗・真言律宗についても特定の時代の宗派研究に限定されていたことが問題点として挙げられる。

無論、宗派を中心とした研究がどれだけ地藏信仰史研究に役立つかどうか疑問である。

（特に江戸時代以降。）しかし、地藏信仰の担い手の一つとして仏教寺院の僧尼等の宗教職能者が挙げられる以上、地藏信仰史研究には宗派研究を民間の地藏信仰を研究することと合わせて行なうことも必要と考えられる。（参

### まとめ

以上、戦後の日本地藏信仰史研究の流れを便宜上、4つに分けて論じた。その結果、個別研究については、優れた研究があるが、例えば室町時代以降の地藏信仰の民衆的展開、といった総括的研究には不備があることが分かった。地藏という宗派を超えて、日本全国で信仰されているものを総括することは、困難であろうが、個別研究を踏まえて、総合的な研究を行なう前段階として本稿を記した次第である。本稿で言及した諸氏の優れた研究に感謝しつつ、また言及できなかった優れた研究の多いことを恐れつつ、筆を置く。

### 註

- (1)本書については清水邦彦1994参照。
- (2)日本の曹洞宗には道元とは別系統のものも存在する。また、曹洞宗という名称は道元が明確に否定し、その後の教団の分裂を考慮するにさほど適切とも思われないが、別に的確な名称もないため、便宜上使用する。また、その他の宗派名も問題があるものもあるが、これらも便宜上使用する。

\*『今昔物語集』は小学館日本古典文学全集、『地藏菩薩応驗記』は梅津次郎翻刻1966『大和文化研究』101号、『性公大徳譜』は田中敏子1973「忍性菩薩略行記（性公大徳譜）について」（『鎌倉』21号）より田中氏が諸本を校合したものより引用。『本朝高僧伝・相州極楽寺沙門忍性伝』は『大日本仏教全書』103巻、『岩船山地蔵菩薩縁起』は栃木県郷土文学研究会翻刻1974『国語—教育と研究—』14号、『沙石集』は岩波書店古典文学大系、『雑談集』は三弥井書店『中世の文学』より引用。原漢文の史料は試みに書き下して引用した。

### 参考文献

- 日本石仏協会編 1984 『日本の石仏』No.32  
日本石仏協会編 1994 『日本の石仏』No.71  
大島建彦編 1992 『民間の地藏信仰』北辰堂  
桜井徳太郎編 1983 『地藏信仰』雄山閣  
藤田稔 1969 「地藏信仰の一考察—鎌倉及び茨城を中心として—」『日本民俗学会報』64号 p36～53  
速水侑 1969 「日本古代貴族社会における地藏信仰」『北海道大学文学部紀要』17-1 p43～112  
1970 『観音信仰』塙書房  
1975 『地藏信仰』塙書房  
広瀬良弘 1981 「禅宗の地方発展」池田英俊・大濱徹也・圭室文雄編『日本人の宗教の歩』大学教育社 p132～146  
1988 『禅宗地方展開史の研究』吉川弘文館  
今井雅晴 1975 「時宗と地藏信仰」和歌森太郎編『日本文化史の提言』弘文堂 p201～217  
井上光貞 1975 『新訂 日本浄土教成立史の研究』山川出版社・但し旧版は1956年刊行  
石川純一郎 1995 『地藏の世界』時事通信社  
石川力山 1985 「中世仏教における菩薩思想—特に曹洞宗における地藏菩薩信仰を中心として—」『日本仏教学会年報』51号 p473～488  
1986 「中世曹洞宗切紙の分類試論（八）」『駒沢大学仏教学部論集』17号 p179～213  
現代宗教社会学会研究会 1992 『水子供養に関する統計調査資料』平成三年度科学研究費補助金研究成果報告書  
角川源義 1969 「妙本寺本曾我物語攷」貴重古典籍叢刊3『妙本寺本曾我物語』角川書店

- \* 但し、清水は『角川源義全集第2巻』  
1987 角川書店に所収されたものを使用。  
(p226~326)
- 神原和子・岩本一夫・大西昇1985 「日本人の宗教意識」に関する共同研究の報告、及び論文『東京工芸大学紀要』8-2 p77~114  
1987 「日本人の宗教意識」に関する共同研究の報告『東京工芸大学紀要』10-2 p22~54  
1988 「日本人の宗教意識」に関する共同研究の報告、及び論文『東京工芸大学紀要』11-2 p1~23
- 牧野和夫 1991 「常謹撰『地蔵菩薩靈驗記』和訳絵詞、その他一新出版紹介を兼ねて」『実践女子大文学部紀要』33号 p107~124
- 真鍋広済 1928 「実睿の『地蔵菩薩靈驗記』の著作時期について」『竜谷大学論集』279号 p103~108  
1932 『地蔵説話の研究』顕真学苑  
1939 『地蔵巡礼』森江書店  
1941 『地蔵尊の研究』富山房書店  
1957 「地蔵典籍に関する諸問題」『竜谷大学論集』357号 p15~34 1958 「『今昔物語』と『地蔵菩薩靈驗記』」『文学・語学』7号 p37~53  
1959 『地蔵尊の世界』青山書店  
1960a 『地蔵菩薩の研究』三密堂書店  
1960b 「西院河原地蔵和讃成立考」『竜谷大学』353号 p189~195
- 松村寿蔵 1971 「日蓮宗における十王信仰の受容について」『印度学仏教学研究』19-2 p233~236
- 松尾剛次 1995 『勸進と破戒の中世史』吉川弘文館
- 松浦秀光 1969 『禅家の葬法と追善供養の研究』山喜房
- 松山善昭 1967 「近世東北における新仏教の伝播と教団形成」日本宗教史研究会『日本宗教史1』法蔵館
- 松崎憲三 1985 『巡りのフォークロア』名著出版
- 三吉朋十 1985 『武蔵野の地蔵尊(都内編)』有峰書店  
1975a 『武蔵野の地蔵尊(埼玉県東部・川崎横浜編)』有峰書店  
1975b 『武蔵野の地蔵尊(埼玉編)』有峰書店
- 森栗茂一 1995 『不思議谷の子供』新人物往来社
- 長沢俊明 1989 『江戸の民間信仰』三弥井書店
- 中野堂任 1988 『忘れられた霊場』平凡社
- 成田貞寛 1960 「鎌倉時代に於ける南都仏教の展開—特に良遍の危機意識を中心として—」『印度学仏教学研究』8-2 p663~665
- 西山厚 1988 「講式から見た貞慶の信仰」中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究・下』法蔵館 p231~256
- 大橋俊雄 1973 『時宗の成立と展開』吉川弘文館
- 追塩千尋 1995 『中世の南都仏教』吉川弘文館
- 大島建彦 1992 『道祖神と地蔵』三弥井書店
- R. J ツヴィ・ヴェルブrouスキー 1993 「水子供養—日本の最も重要な「新宗教」に関する(鳥井由紀子訳)覚え書き—」『国学院大学日本文化研究所紀要』72輯 p47~241
- 桜井徳太郎 1970a 「本邦シャマニズムの変質過程—とくに地蔵信仰との習合について—」『日本歴史』262号 p1~23  
1970b 「古代郷土生活の民俗学—シャマニズムよりの追究—」『郷土史研究講座』朝倉書店
- \* 但し、清水は桜井1989『靈魂観の系譜』講談社に所収されたものを使用(p14~46)

- 清水邦彦 1992 『『地藏菩薩応驗記』の基礎的研究』『日本文化研究』3号 p1~13
- 1993 「法然浄土教の地藏誹謗」『日本思想史学』25号 p43~54
- 1994 「水子について」『比較民俗研究』9号 p172~180
- 1995a 「良遍の地藏信仰」『印度学仏教学研究』43-1 p128~131
- 1995b 「現存本『地藏菩薩靈驗記』について」『日本文化研究』6号 p41~53
- 1995c 「貞慶の地藏信仰」『倫理学』12号 p31~42
- 1996 「水子供養」『日本の仏教』6号 掲載予定
- 真野俊和 1980 「現世と冥界」『日本宗教史研究年報』Ⅲ p21~43
- 菅原征子 1966 「平安末期における地藏信仰」『史潮』96号 p31~52・75
- 平雅行 1922 『日本中世の社会と仏教』塙書房
- 多賀宗準 1958 「栄西僧正の一著作『菩提心別記』は『地不の決』と同本歟」『日本歴史』125号 p56
- 竹居明男 1980 「解脱上人貞慶と春日信仰」『季刊日本思想史』15号 p3~21
- 圭室諦成 1963 「治病宗教の系譜」『日本歴史』186号 p2~15
- 1963 『葬式仏教』大法輪閣
- 田中久夫 1972 「地藏信仰の伝播者の問題」『日本民俗学』82号 p20~39
- 1986 『仏教民俗と祖先祭祀』神戸女子大東西文化研究所
- 1989 『地藏信仰と民俗』木耳社
- 田野登 1994 『大阪の地藏』溪水社
- 上田さち子 1977 「貞慶の宗教活動について」『ヒストリア』75号 p27~74
- 梅津次郎 1966 「常謹撰『地藏菩薩霊驗記』刊行に際して」『大和文化研究』100号 p21~25
- 山本世紀 1981 「北関東における禅宗の展開」池田英俊・大濱徹也・圭室文雄編『日本人の宗教の歩み』大学教育社 p147~161
- 和歌森太郎 1951 「地藏信仰について」『宗教研究』第124号
- \* 但し、清水は桜井徳太郎編『地藏信仰』（1983 雄山閣）に所収されたものを使用（p45~71）。
- 1969 『歴史研究と民俗学』弘文堂
- 渡辺綱也 1966 古典文学大系『沙石集』補注
- 渡浩一 1977 「民間地藏信仰の一考察（上）」『仏教民俗研究』4号 p11~23
- 1980 「民間地藏信仰の一考察（下）」『仏教民俗研究』5号 p11~36
- 1983 「中世地藏説話集の編纂をめぐって」『仏教文学』7号 p27~35
- 1984 「中世地藏説話概観」『東洋大学大学院紀要』20号 p85~93
- 1985a 「十四卷本『三国因縁地藏菩薩霊驗記』とその周辺」『東洋大学大学院紀要』21号 p167~181
- 1985b 「近世地藏説話集と地藏縁起—十四卷本『地藏菩薩霊驗記』の場合—」『武蔵野文学』33号 p14~18
- 1989 「『地藏利益集』の世界—貞享・元禄時代の民間地藏信仰—」『仏教民俗研究』6号 p39~58
- 1991 「『地藏菩薩利生記』について」『明治大学教養論集』242号 p39~59
- La Fleur, R. William 1992 "Liguid Life, abortion and Buddhism in Japan" Princeton U. P.
- [地藏信仰研究文献目録一覽]**
- 真鍋広済 1959 「地藏文献目録」『地藏尊の世界』青山書店 p217~226
- 渡辺隆生 1973 「地藏研究とその経典」『国訳一切経・大集部第五巻』月報
- 仏教民俗研究編集部 1980 「地藏関係主要

参考文献目録『仏教民俗研究』5号  
p49～52  
桜井徳太郎編 1983 「主要参考文献」『地蔵  
信仰』雄山閣 p302～305  
金岡秀友編 1988 「菩薩関係文献目録」『大  
乗菩薩の世界』佼成出版社 p70～132  
大島建彦・渡浩一 1992 「地蔵信仰に関す  
る文献一覧」大島編『民間の地蔵信仰』  
北辰堂 p551～566

石川純一郎 1995 「文献資料一覧」『地蔵の  
世界』時事通信社 p333～347  
大濱徹也・圭室文雄・宮田登・根本誠二編  
1995 『日本宗教史研究文献目録1』岩  
田書院 近刊

\*本研究は文部省科学研究費補助金（特別研  
究員奨励費）による研究成果の一部であ  
る。

## 新刊紹介

大塚和義著

### 『アイヌ—海浜と水辺の民—』

本書は国立民族学博物館を拠点にアイヌ民族  
を始めとした北方少数民族の民族誌的研究を精  
力的に進められている氏のアイヌ文化に対する  
視点が鮮明に提示された一書である。

まず内容を紹介すると第一部アイヌの文化と  
歴史（アイヌ文化のダイナミズム、アイヌ民族  
の成立と展開、アイヌ風俗の和人社会における  
受容・模倣について、北方との交流）、第二部  
アイヌの伝統文化の現在（イオマンテ、根っこ  
をはやしたチプサンケ祭、フクロウ送り、アイ  
ヌのイタオマチブ、アイヌの木彫り熊、寛政10  
年のフィールドワーク）、第三部アイヌ民族復  
権運動（アイヌ—民族的復権をめざして—、  
アイヌ民族の要望、先住民族の環境観と共生の  
思想、二風谷ダム裁判・証人陳述書）の全三部  
十三章構成になっている。第一部ではアイヌ民  
族が単なる狩猟採集民ではなく、東北アジアで  
幅広く交易を展開してきた事実をあげ、一例と  
してアイヌ文様の意味・役割をナナイ・ウリ  
チ・ニブフ・ウイルタなど他の民族の文様と比  
較しつつ、文様の成立と民族としてのアイヌの  
成立との関係を論じ、そのアイヌ文様の衣服が  
禁止令にかかわらず和人社会に受容されていく  
様子を菅江真澄はじめ近世の随筆類などから丁  
寧に描出している。第二部では同化政策によっ

ても変わらない精神世界がその根幹となり、ア  
イヌ民族の伝統世界を時代状況の中で再生産し  
ていく過程を丸木舟（イタオマチブ）の復元、  
民族技術の再生などの個別事例を通して紹介し  
ている。第三部はアイヌ新法の制定や二風谷ダ  
ム裁判などアイヌ民族をめぐる現実的政治課題  
の中で、アイヌ民族に対する行政当局の認識の  
欠如は、同時に国民一般の問題とする著者の  
思いが裁判の証人陳述書の一言一句から読み取  
れる。多民族が共生する成熟した国家、日本が  
創出できるかの試金石にもなるとの、著者の研  
究者としての立場を踏まえた発言で傾聴に値す  
る。日本という国家の中に様々な民族がすでに  
混住している現状を直視し、共存関係を作り上  
げて行く方途を“文化”をキータームとして抑  
制の利いた文章で書き上げている。巻末にはア  
イヌの工芸としてアットゥシ衣、魚皮衣、山丹  
錦衣などの衣服、酒箸（イクパスイ）、ガラス  
玉の首飾りなどアイヌ民族の代表的な工芸品が  
写真と共に解説され、アイヌ民族の歴史の略年  
表が付されている。現在のアイヌ民族を取り巻  
く状況を理解するにも恰好の概説書といえるで  
あろう。（佐野賢治）

1995.10月刊 A5判 248頁 新宿書房 2,800円